

シフトレフト実践の 継続的な取り組み



“わかる”から“使える”へ、その先に見えたもの

2026年9月

リコーITソリューションズ株式会社 加茂 悠

共著者: 田口 真義、滑川 梨紗

with you :: with value

所属 リコーITソリューションズ株式会社
 デジタルサービス&プロダクツ事業本部
 B2Bプロダクト事業センター Q&S推進部

組織の役割 製品・サービスに対する**第三者評価**

経歴 ソフトウェアテスト・品質保証業務に従事。
 主に要求分析、テスト設計、品質向上活動に取り組み、
 利用者視点を取り入れたシフトレフト活動を推進



テスト設計コンテスト'23準優勝(チーム名：爆裂たまご)
[ソフトウェアイノベーションシンポジウム2024](#)登壇：
「シフトレフトで実現する価値提供の新たなアプローチ」

ソフトウェアイノベーションシンポジウムとは
・一般社団法人情報サービス産業協会(JISA)が主催するイベント
・ソフトウェア開発に携わる技術者や研究者が集まり、最新のトレンド情報や実践的な開発事例を共有し、
技術者同士の情報交換や交流を促進することを目的として毎年実施されています

© 2026 Ricoh IT Solutions Co., Ltd.



リコーグループに30年以上貢献してきた経験やノウハウを活かし、リコーグループ内外問わず品質の専門家として、テストだけではなく開発プロセス全体の課題を共に解決します



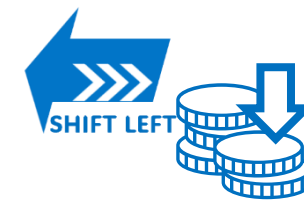
シフトレフトによる
品質向上

品質要求分析を用いて現場を知り、提供すべき価値を正しく捉えることで開発の上流から品質を作りこみ、製品やサービスの利用時品質を高めます



シフトレフトによる
生産性向上

上流品質を向上させることで不明点確認のためのやり取りを削減し、テスト要求を正しく捉え、開発チーム全体の生産性向上に貢献します



シフトレフトによる
コスト削減

下流工程での不具合や要望による手戻りによるコストを削減するだけでなく、リリース後の不満や問い合わせへのサポートコストを抑えることができます

シフトレフト以外にも、様々な支援サービスを提供しております

「シフトレフトで実現する価値提供のアプローチ」

を継続的に実践する中で見えて来た
さらなる活用と発展に向けた取り組みをご紹介します

ソフトウェア開発に携わる皆様にとって、
価値ある製品づくりをどう実現するかのヒントになれば幸いです



SQiP2025発表振り返り

「シフトレフトで実現する価値提供のアプローチ」とは

SQiP2025でお話したこと



「シフトレフトで実現する価値提供のアプローチ」とは
現場で起きている問題と課題、解決のためのアプローチ

SQiP2025発表振り返り

RICOH
imagine. change.

問題(現場で起きていること)

⚠ 開発工程の後半で価値のズレに気づき、
対応の割り切りや先送りが発生



企画担当者

出来上がったものを見たら思ったものと違いますね...

指摘・要望

妥協

対応するのにリリースを伸ばすと
市場提供が遅れ、ビジネス機会の
損失につながる、コストもかかる。
今は割り切るしかないか...

本来提供したい価値が
お客様に届かない可能性がある

シフトレフトで実現する
価値提供のアプローチ

“品質要求分析”
の導入

+

価値検証タイミングの
“シフトレフト”

開発の早い段階で
価値を検証することで
割り切りや先送りを未然防止

「シフトレフトで実現する価値提供のアプローチ」とは “品質要求分析”と“シフトレフト”とは

SQiP2025発表振り返り

RICOH
imagine. change.



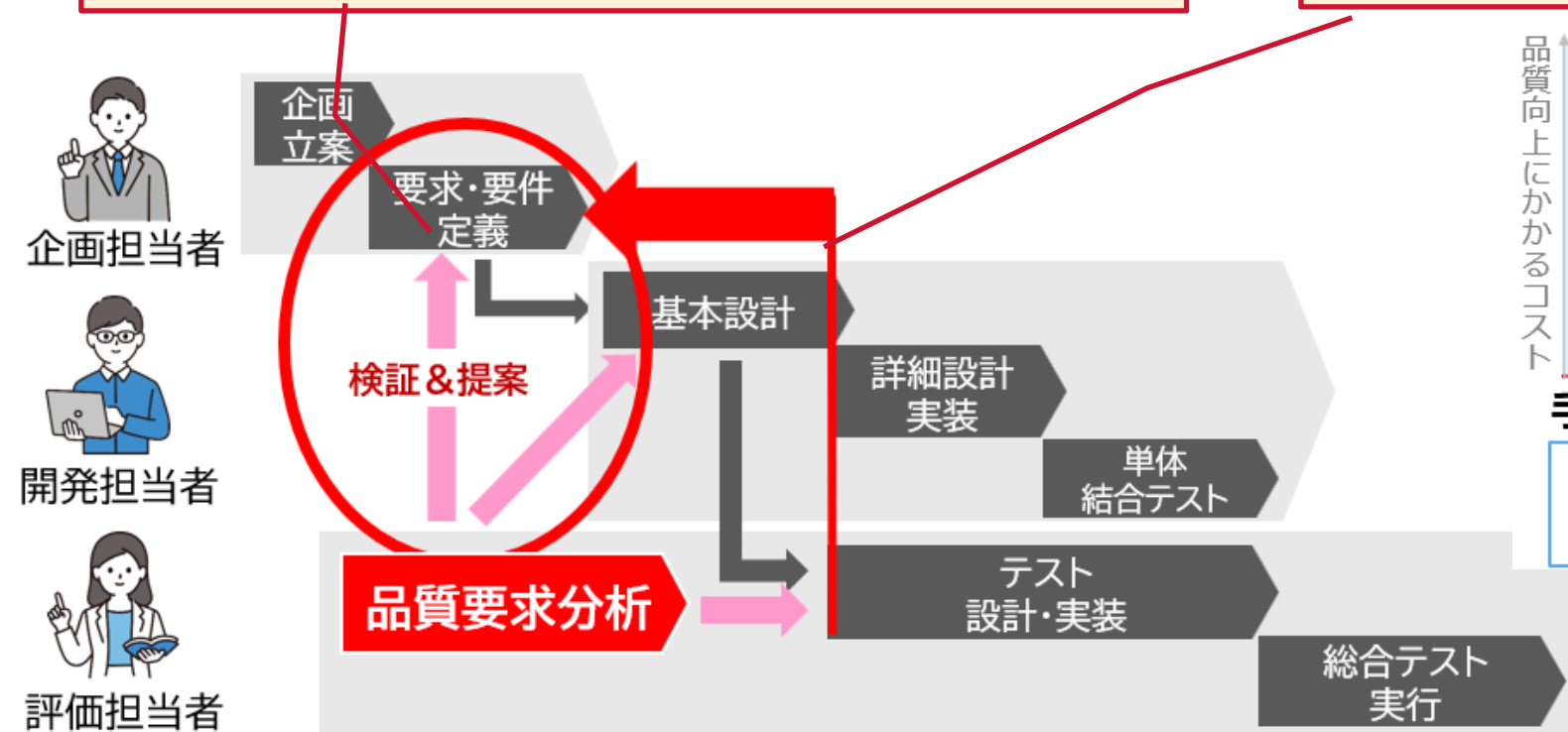
< 品質要求分析 >

提供すべき価値を正しく捉えるための
事前調査や仮説立案と改善提案を
評価担当者が実施する



< 価値検証タイミングのシフトレフト >

品質要求分析のアウトプットを
開発の早い時期に関係者間で議論する



手戻りコストの法則 引元：ソフトウェア開発 201の鉄則(日経BP社)「原理41

要求・要件	基本設計	実装	総合テスト	リリース後
1	5	10	20	200～

開発後半での割り切りや先送りを未然防止
⇒さらに手戻りコスト削減にもなる！

「シフトレフトで実現する価値提供のアプローチ」とは 新たな課題と“わかる”から“使える”へ

SQiP2025発表振り返り

RICOH
imagine. change.

新たな問題(3つの壁)



成果物の粒度のばらつき

調査・分析に工数がかかる

上流工程からの参画するへの抵抗感

アプローチ

品質要求分析
実践ガイドラインの作成

ワークショップ、
実プロジェクトへの適用
で効果検証

2025年の到達点

- ✓ 進め方の標準化でばらつきが低減
- ✓ 必要なコストを抑えつつ実現可能であることを確認
- ✓ 上流で得た成果物が開発工程全体の重要なインプットに

必要そうなのは
“わかる”



これは
“使える”!!





“使える”のその先へ

さらに価値を高め、活用を広げるには



“使える”のその先へ さらに価値を高め、活用を広げるには



わかる

必要性は理解できるが、
使い続けるのは難しい



使える

実践ガイドラインにより、
現場で使える状態に



その先へ

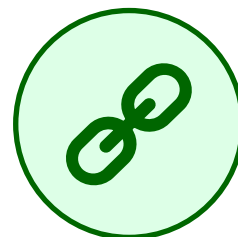
さらに価値を高め、
活用を広げていく段階へ

～ その先へ、進むために見えてきた方向性 ～



発展①

生成AIの活用による効率化



発展②

次工程との連携強化

“使える”のその先へ 発展①生成AIの活用による効率化

品質要求分析には、調査、整理、作成などの“作業”が多く含まれる



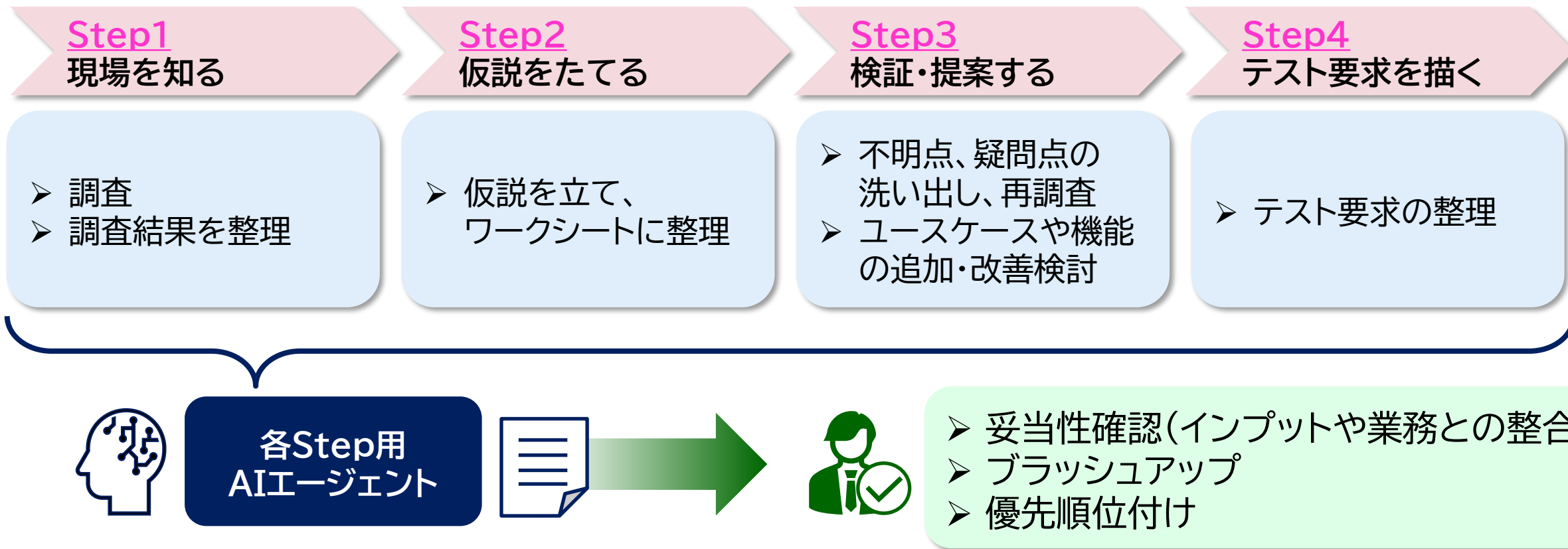
25年度の実績で

3日

※プロジェクト特性や規模によってはこれ以上かかることもあります

 “作業”を効率化できれば、人はより創造的な活動に時間を使える

“使える”のその先へ 発展①生成AIの活用による効率化



AIは成果物作成を支援し、人は判断と創造に集中

“使える”のその先へ 発展①生成AIの活用による効率化 ～効果～

Before: 人中心で実施

3日程度

人: 調査・整理・作成



After: AIと人の協働

1日程度

AI: 成果物生成 約1時間
人: 確認、ブラッシュアップ 半日前後



ばらつき:

AIエージェントにより**成果物の観点や粒度がそろう**



コスト:

人の“作業”が減り**全体的に工数短縮**



抵抗感:

小さな工数で試せるため**現場で受けいれやすい**



成果物を次工程でどう活かすか？という新たな課題も見えてきた

➡**②次工程との連携強化へ**

■ 品質要求分析の成果物をどうテスト設計へつなぎ、活かすか

品質要求分析で整理した情報

- ・ユーザー要求/課題/背景
- ・品質として何を重視するか
- ・総合テストで確認すべき方向性

Why
(なぜ必要か？何が問題か？)

そのままでは
落とし込みにくい



両者の
橋渡しが必要

テスト設計に必要な情報

- ・テスト観点
- ・評価要否、評価の実現性
- ・合否基準

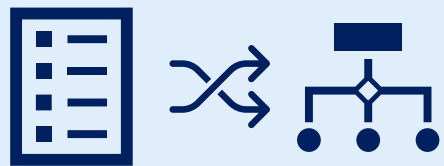
What、How
(何をどうやって確認するか？)



Whyで整理した情報をWhat/Howに変換できれば
スムーズにテスト設計につなげられる

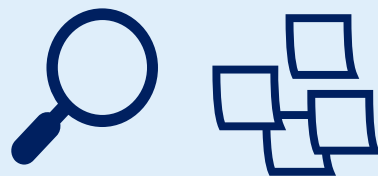
品質要求分析の成果物を品質特性を介してテスト観点へ変換

品質特性へマッピング



テスト要求を
共通の品質モデルに
置き換え

抽象→具体化



テスト観点表(※)で
具体的な
テスト観点へ展開

評価要否を分類



テスト要求と対比し
評価すべき
テスト観点を選定

実現性を確認



評価するための
合否基準、簡易手順を
設定

品質特性を変換軸にすることで、
品質要求分析の成果物をテスト設計で扱える形へスムーズに変換

“使える”のその先へ 発展②次工程との連携強化 ～効果～

Before: 機能テスト中心

類似案件の
起票件数(過去実績)

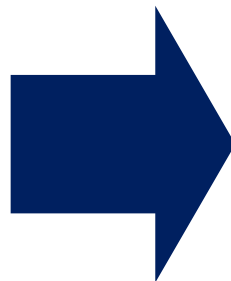
10件

機能仕様との不適合が主

仕様・機能の確認が中心

対象プロジェクトの特徴

- ・ローコード開発
- ・画面数は15画面程度
- ・これまでは機能テストを主に実施



After: 品質要求分析の成果物を活用しテスト観点化

「検出できた課題の質」が変化！

起票52件のうち、利用者・業務視点の品質課題に分類されるものが

45件(起票件数の8割)

リリース前に
改善へ！



業務上の期待との不整合: 21件

例: 業務上の制約や運用ルールを満たせない



利用者の操作性に関する課題: 13件

例: キー操作で利用できない機能がある



利用者を迷わせるフィードバック: 11件

例: 次のアクションを想定しづらいエラーメッセージ

品質要求分析の成果物を次工程に連携したことで

機能確認だけでは発見しにくい**利用者・業務視点の品質課題を開発段階で検出・改善できた**

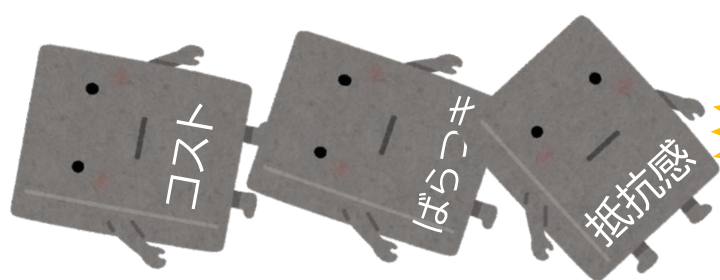


まとめと今後の展望



25年度時点

品質要求分析ガイドラインで
3つの壁に一定の効果あり



効果
あり

その先へ



必要コスト: 3日程度



成果物は価値検証だけでなく
開発担当者へのインプットに

26年度

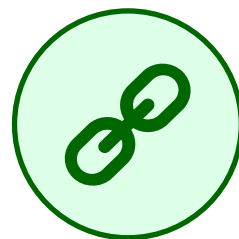
2つの発展で
さらに価値を高め、活用を広げる



①生成AIの活用による効率化

必要コスト: **1日程度**

作業負担を低減し、人は判断に集中



②次工程との連携強化

成果物は次工程にスムーズに連携し
全開発工程に価値あるインプットに

AI時代にこそ、
価値を見極め、検証する力が重要になる

AIで開発はますます速くなる



価値の見誤りの影響が大きくなる



上流で本当に必要な価値を見極め、検証する重要性が増す！

シフトレフトで実現する価値提供のアプローチ
(品質要求分析＋価値検証のシフトレフト)は
AI時代の品質づくりの土台に

RICOH

リコーITソリューションズ 株式会社

with you :: with value